この冊子の他の記事はこちらのページをご覧下さい。
https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/mail_magazine/genre/kusabana.html

農村工学研究部門メールマガジン

農村の草花

記事・タイトル	配信No.	配信年月
藪の中でひっそりと咲く花の「隠された心」とは～ヤブラン～	第134号	2021年7月
この草の上なら転んで擦り傷をこさえても血が止まる!? ～チドメグサ～	第133号	2021年6月
夜の路傍で月を見上げているあの草は? ～コマツヨイグサ～	第132号	2021年5月
タンポポの変異?いえいえ、そっくりだけど別種の外来種です～ブタナ～	第131号	2021年4月
難を転じて福となす 来年度は人々が集い談笑し合える年になりますように ～ナンテン～	第127号	2020年12月
ガーデニングなどでお馴染みのあの草は咳止めの薬草だった ～リュウノヒゲ～	第126号	2020年11月
中国最古の薬物書にも登場し、今でも日常的に飲用するスーパー健康食品 ～チャノキ～	第125号	2020年10月
楊貴妃が愛し、あの名著にも登場する赤い実は不老長寿の薬 ～クコ～	第124号	2020年9月
明智光秀の家紋で有名なあの草は,咳止めにも魔除けにもなる? ～キキョウ～	第123号	2020年8月
邪気を払う? 田んぼで最も馴染みのあの草の名の由来は……コナギ	第122号	2020年7月
今年最後に紹介する草花は"善良で陽気"な外来種 ～ウラジロチチコグサ～	第117号	2019年12月
道ばたでみかける試験管ブラシのような穂の草は? ～チカラシバ～	第116号	2019年11月
秋耕後の田んぼで見かける"黒い芋"の正体は ～クログワイ～	第115号	2019年10月
秋の野辺によく目立つあの花はサラダ菜の仲間なんです ～アキノノゲシ～	第114号	2019年9月
刈り田の宝もの探しにはうってつけの小さな絶滅危惧種 ミズマツバ	第113号	2019年8月
とっても大きそうな名前ですが、実際は地べたに伸びる小さな草花です ～コニシキソウ～	第112号	2019年7月
初夏から梅雨時にかけて里山にみられる万葉歌人も好んだ白い花 ～ウツギ～	第111号	2019年6月
田んぼに浮かぶコケだけど虚仮にしないでね! ～イチョウウキゴケ～	第110号	2019年5月
春の風薫るころ、野良をピンク色に染め上げる中国由来の花 ゲンゲ	第109号	2019年4月
来年は心清らかに過ごせますように お正月の縁起物 ～ウラジロ～	第105号	2018年12月
この季節、道端でよく見かける熱帯からやってきた「ひっつきむし」 ～コセンダングサ～	第104号	2018年11月
秋も深まる中、大豆のご先祖さまを見つけてみよう ～ツルマメ～	第103号	2018年10月
人生いろいろ、好みもいろいろ、蓼(たで)食う虫も好き好き、の蓼とは? ～ヤナギタデ～	第102号	2018年9月
残暑の中、このピンク色の花穂が目立ち始めると、秋の気配を感じさせます ～ツルボ～	第101号	2018年8月
最近では水田の中も「欧米か!」が進んでいるんです～アメリカアゼナ ～	第100号	2018年7月
手入れが行き届かないと、貧乏神のようなこの草に襲われるゾ!?～ヤブガラシ～	第99号	2018年6月
水辺で良くみかける黄色いアヤメの正体は競合力の強いインベーダー ～キショウブ～	第98号	2018年5月
春のアゼを代表するタンポポによく似た刈り取りに強い草 ～オオジシバリ～	第97号	2018年4月
寒天を仰ぐ縁起のよい冬緑性のシダ ～フユノハナワラビ～	第93号	2017年12月
晩秋の山野に咲く黄色の小花は,まるでありがたい薬師さまのよう ～ヤクシソウ～(4)	第92号	2017年11月
刈り田によく見られる小さなヒマワリのような花 ～タウコギ～	第91号	2017年10月
毎年、この時期に現れ消えていくあの花は ～ヒガンバナ～	第90号	2017年9月
とても乙女が口に出しては呼ぶことができないかわいそうな花 ～ヘクソカズラ～	第89号	2017年8月
ぴりりと辛くはないけど、見向きもされずに消えていくのはイヤです ～サンショウモ～	第88号	2017年7月

農村工学研究部門メールマガジン　購読申込はこちら
https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/mail_magazine/index.html

禁・無断転載

2022農研機構　秋のオンライン一般公開　特別冊子

農村の草花

美味しく食べられる農村の草花　編

この冊子は、農村工学研究部門メールマガジンから一部抜粋しています。

農研機構　農村工学研究部門

分布：全国

スベリヒユ　（スベリヒユ　科）

学名：*Portulaca oleracea*（ポルチュラッカ　オレラケア）

滑り莧　　別名：ヒョウ，ヒョウナ，ウマビユ，アカジシャ

主な生育場所

畦や空き地，庭先，道ばたなどで見られる。よく陽の当たる乾いた場所を好み，湿っぽい畦などには少ない。また，肥えた土壌でよく生育するが，極端な高窒素の環境下では生長が抑制されてしまう。

特　徴

種子で繁殖する一年草。

全体が多肉質で，肉質の丸みを帯びた葉には光沢がある。茎は赤紫色を帯びて四方八方に枝分かれして地面を這う。7月頃から秋にかけて，各枝先に径1cm弱ほどの黄色い5弁花を1～5個着ける。果実はフタのあるカップ状で，熟すと帽子状のフタが外れ，残された皿に多数の黒い種子が乗る。

名前の由来:　昔から食用とされ，茹でて食べると野菜の「ヒユ」（アマランサスの仲間）に似ているが，ヒユよりも粘り気が強いことから，「ぬめりひゆ」。これが転じて「スベリヒユ」となったという。

スベリヒユの花

＜農業との関係＞

乾燥耐性があるため，炎天下でもよく目立ち，抜いてもすぐ枯れにくく再活着しやすいことから，一般的には畑の強害草として知られている。しかし，密生することは少なく，また根系は浅く競合範囲も限られることから，作物との養分競合や水分競合に対しては，多分に過大評価である。他の雑草が枯れ込むほどの酷暑下でも生育できるたくましさが害草としてのイメージを高めてしまっているのだろう。

マルチの隙間から生育するスベリヒユ

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
生育期			■	■	■	■	■	■	■	■	■	
開花・結実期						■	■	■	■			

1年あたり　1　世代

＜類似種＞ ハナスベリヒユ（ポーチュラッカ）は，2～3cmほどの様々な色の花を咲かす多年草の園芸種である。また，葉が扁平な棒状となるマツバボタン（松葉牡丹）やヒメマツバボタン（姫松葉牡丹）もスベリヒユと同属の園芸種である。

＜一言うんちく＞

スベリヒユは，気温が低下する夜間に気孔を開いて二酸化炭素を貯蔵しておき，昼間は気孔を閉かずに光合成する植物（CAM植物）なので，より気温の高く乾燥した場所にでも適応できます。このため，他の植物が生育できない（＝競争相手がいない）環境下に侵出できるのです。

乾燥した土壌でもよく生育する

＜人との関わり合い＞

山形県置賜地方では，「ひょう」「ひょうな」として，店先で販売されるなど「山菜」として扱われている。開花前に摘んでおひたしにしたり，みそ和えなどにするとねばりけがあって美味しい。また，乾燥して保存食とする。

生薬名「馬歯莧（ばしけん）」としても知られ，タンニン，ビタミンC，B1や多くのミネラルを含むので，乾燥したものを煎じて服用すれば，利尿、解毒などに効果がある。また，生の葉の絞り汁は，いぼ取り，虫さされ，湿疹によいとされる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：夏】

釣るされて一期しまひぬ辷（すべ）り莧

月落ちてこよひの名也馬莧艸（沾圃）　※馬莧艸＝スベリヒユ

入間道の大家が原のいはゐ蔓ひかばぬるぬる吾にな絶えそね（万葉集・作者未詳）　※いはゐづら＝スベリヒユ

分布：全国

セリ　（　セリ　科）

学名：*Oenanthe javanica*（オエナンセ　ジャバニカ）

芹　　別名：ミズゼリ，カワクタ，カワゼリ，シェリコ，セイリ，シェリッパ，シェリ，セル

主な生育場所

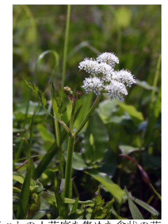
全国の水田，水田畦畔，休耕田，水路や溝，湿地など水辺に普通に生育する。水田内では畦際に多い。清流から富栄養化が進んだ水域まで生育可能。また，畑地でも水やりを欠かさなければ栽培可。

特　徴

無毛の茎は枝分かれして根元は地面を這うが，茎の先は立ち上がる。細長い繁殖茎を出して繁殖し，秋にほふく茎の節から新苗を生じる。3小葉が1～2回羽状につく複葉は互生し，葉柄の基部は茎を抱く。7～8月ごろに茎の先から直立する花茎を伸ばし，10～25花をつけた花序を集めて傘状の花序となる。花は小さく白色5弁。

名前の由来:

早春から若菜が競り合うように地下茎を四方八方に伸ばし旺盛に生育し，大きな群落をつくることから「競り（せり）」。



いくつかの小花序を集めた傘状の花

＜農業との関係＞

普通に見られる水田雑草であり，ときに強害雑草となる。水田内では通常，種子繁殖はせず，栄養繁殖で増殖する。越冬株は乾燥に弱く，冬期に耕うんを行い土壌表面に露出させると死滅する。また，浅水状態で代掻きすると，越冬株が土中に埋設され再生が著しく阻害されるが，通常の水深では水中に浮遊してしまい，活着後の生育量が大きくなるので多発地帯では注意が必要である。

早春から競い合うように新芽を伸ばすセリ

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
生育期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
開花・結実期							■	■				

1年あたり　1　世代

＜類似種＞　とくに寒冷地では猛毒のドクゼリがセリと同じような生育環境下に見られる。ドクゼリはセリによく似るが，大型で，セリと異なり太くタケノコ状となる地下茎を有する。また，セリ独特の香気もないため，注意すれば見分けることは比較的容易である。

＜一言うんちく＞

春の七草にも数えられているセリは，早春から摘むことができる若菜として馴染み深く，日本原産の最古の香味野菜として万葉の時代以前から栽培されてきました。現在，雑草として田んぼ周辺で見られるセリも，かつては栽培されていたものかも知れませんね。

ドクゼリは株元の地下茎が太くタケノコ状となることが特徴

＜人との関わり合い＞

古来から食用に利用され，同一種ながら清流に生え，食に適するものを「水セリ」，水田のようにあまり水質がよくない環境に生育するものを「田ゼリ」と呼んで区別してきた。暖地ではほぼ周年摘み取ることができるが，早春には若い茎を根元から，秋には茎先の新しい葉を摘むのが良い。丁寧に洗って，サラダ，テンプラ，和え物，煮物，炒め物など用途は広い。秋田ではきりたんぽ鍋にも入れる。葉に含まれる精油には発汗作用があり，食欲を増進させる。また，乾燥させた葉を入浴剤とすると肩凝りに効く。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：春（芹），夏（芹の花）】

鶏にやる田芹摘みにと来し我ぞ（高浜虚子）　うすらひやわづかに咲る芹の花　（其角）

ますらをと思えるものを太刀はきてかにはの田居に芹そ摘みける（万葉集・薛妙観命婦）

余念なきさまには見ゆれ頬かむり母が芹つむきさらぎの野や（若山牧水）